英語科

教科領域研究テーマ

【仲間との関わりの中で，すべての生徒が主体的に
学ぼうとする英語授業】



英語科

仲間との関わりの中で，すべての生徒が主体的に学ぼうとする英語授業

実　践　者　河野　　操，河野　圭美
愛媛大学研究パートナー　立松　大祐

第１章　はじめに

英語教育において，４技能を統合した指導や，授業を英語で行うこと，CAN-DOリストの形での学習到達目標に基づいた指導などを通して，コミュニケーション能力の育成が強調されてきた。

そのような中で，コミュニケーション活動が，内容のみの伝達ではなく，「伝えたい」という気持ちを生み，人と人との心がつながり合えるようなものになるよう指導を工夫していきたい。前年次までにおいて，ペアやグループ学習，retelling活動，ユニバーサルデザインの発想などを取り入れ，すべての生徒が主体的に学ぼうとする英語授業を目指して研究を行った。生徒たちは，仲間と関わり学ぶ楽しさを味わう中で，少しずつ自信を付け，自分の気持ちや考えを表現し伝える力や，仲間の多様な価値観や考え方を認める力を身に付けることができたことが成果として挙げられる。しかし，仲間と学びを深めることができないペアやグループもあり，すべての生徒が自尊感情を高めたり，自分を活かしたりして主体的に学ぼうとする姿勢につながらなかった。

そこで本年次は，ペアやグループでの活動を見直し，他の個性を認め，折り合いをつけながら誰とでも平和な関係を築いていこうとする力（共生の力）と，課題解決に向けて，自ら考え主体的に学んでいこうとする力（自立の力）を育てたい。その中で，すべての生徒の自己肯定感が育ち，主体的に学ぼうとする姿勢こそが，持続可能な社会への形成につながるのではないかと考え，本研究テーマを設定した。

第２章　研究の実際

研究（その１）

コミュニケーション力を高める活動の工夫

（実践者）河野　　操

１　研究テーマ設定の理由

英語の授業を進める中で生徒の実態を見ると，英語が得意な生徒と苦手な生徒で大きな学力差がある。苦手な生徒の中でも，英単語が覚えられない，書けないレベルのつまずきから，英語を「話すこと」に抵抗を感じているつまずきまで幅広い。単語の綴りを間違える生徒にドリルで繰り返し教えることは，他の生徒との学力差を拡大するだけでなく，生徒の学習意欲を衰退させ，基礎技能の記憶や定着においても大きな効果が見られない場合もある。むしろ，生徒同士の協同作業を通してより高次の創造的活動に取り組ませ，多くの資料や教材に触れる機会を提供したり，自分の考えを表現する機会を多く与えたりするほうが，基礎技能の習得においては効果的であると思われる。誤りは矯正したり訓練したりしなくても，創造的な活動と仲間との交流の中で自ずと修正されていくと言われている（江利川，2013）。

外国語は言語や文化が異なる多様な人間同士をつなぐものである。そのため外国語教育は，スキルの習得だけでなく，個性や考え方が異なる他者とも積極的にコミュニケーションを図り，良

好な関係を築くことが大切である。よって，異質な個性同士が互いに高め合い全員を伸ばす協同学習は外国語教育では必要である。そこで本研究では，英語でプレゼンテーションするなど活動を高度化し，仲間と協力しながら課題を解決することによって，総合的にコミュニケーション力を高める方法を検討したい。

2　研究の内容と方法

(1)　話し手を励まし，聴こうとする態度を育成する。

○　アイコンタクトを取る，相づちを打つ，話をつなぐ，聞き返す，驚きや喜びを示す等の表現が使えるようにする。

○　活動ごとにお互いに良かった表現やより良い表現を助言し合う。

(2)　様々な質問の仕方を定着させる。

○　初歩的な段階では５Ｗ１Ｈを中心に話し手の情報が不足している部分を質問する。

○　教科書の内容を理解した上で，内容理解に関する質問を考える。

(3)　既習表現を使った対話活動に取り組ませる。

○　テーマを設定し，帯活動としてチャットの時間を設定する。

(4)　グループで発表原稿の練り直しをさせる。

○　プレゼンの原稿をグループで回し読みし，ワークシートに訂正箇所やよりよい表現のアドバイスを書き込む。

3　研究の実際

(1)　単 元 名　TOTAL ENGLISH 2　Lesson 4　Taku in the U. K.

(2)　単元目標

観　点	目標及び評価規準
(ア)　コミュニケーションへの関心・意欲・態度	①紹介したい内容を意欲的に伝えようとしている。
(イ)　外国語表現の能力	①イギリスのことを既習文型を使って書くことができる。 ②イギリスのことを聞き手に分かるように発表することができる。
(ウ)　外国語理解の能力	①内容を正しく理解することができる。
(エ)　言語や文化についての知識・理解	①イギリスの文化や名物を知り，イギリス社会の多様性を理解している。 ②Will you ～？/ Shall I ～？/ May I ～？の使い方を理解している。

(3)　指導計画（全10時間）

時間	○ねらい　・学習活動	単元の評価規準	評価方法
1	○本単元で身に付ける技能や理解する内容を知る。 ・調べる項目をジャンルごとに発表する。 ・発表のグループをつくる。 ・役割分担をする。 ○イギリスについて資料や情報を集める。 ・インターネットや図書館を利用して調べる。		

1	○イギリスについての紹介文を書く。 ・同じ内容の生徒とグループを作り，紹介文をまとめる。	(イ)－①	ワークシート
1	○紹介のスライドをつくる。 ・写真等の資料を取り入れ，発表用のスライドをつくる。	(ア)－①	活動の観察
1	○原稿の修正をする。 ・辞書で確認したり，改善点を話し合ったりする。 ○プレゼンのリハーサルをする。 ・お互いに助言し合う。 ○イギリスについてプレゼンする。 ・質疑応答を行う。 ・感想・意見発表をする。	 (イ)－② (ウ)－①	 活動の観察 ワークシート
1	○イギリスについてプレゼンする。 ・質疑応答を行う。 ・感想・意見発表をする。	 (イ)－② (ウ)－①	 活動の観察 ワークシート
1	○新出文型を理解する。(Lesson 4 A ～ 4 C) ・新出文型を使った言語活動をする。	 (エ)－②	 ワークシート
1	○本文の内容を理解する。(Lesson 4 A ～ 4 C) ・新出語句を確認する。 ・Q－Aに答える。 ・音読練習をする。	 (ウ)－①	 ワークシート
1	○道案内の仕方を理解する。 ・地図を使って道案内をする。		
1	○Chapter 2 Project 既習表現を使ってセリフを考える。 ・名画にセリフをつける。		
1	〈ペーパーテスト〉 ○新出文型や新出語句，教科書本文の内容読解力を確認する。	(エ)－① (エ)－②	ペーパーテスト

(4) 指導の工夫

前述の２「研究の内容と方法」に即して指導の工夫について述べる。

ア 話し手を励まし，聴こうとする態度を育成する。

ペア活動やグループ発表会などの時，アイコンタクトをしながら話を聞いたり，相づちを打ちながら話を聞かせたりする習慣をつけさせるようにした。また，音読練習やスキットづくりなどの出来栄えを評価し合い，良いところを見つけてほめる活動を通して，相手が意欲を持って活動に取り組めるような雰囲気づくりを行う。

イ 様々な質問の仕方を定着させる。

教科書本文の内容理解の後，まとめの言語活動の工夫として，内容に関する教師の質問に答えるだけでなく，自分で内容に関する質問を考える活動を行う。内容理解をより深めるとともに，様々な種類の質問を考えるようにする。

ウ 既習表現を使った対話活動に取り組ませる。

毎時間帯活動としてテーマを設定し，チャットに取り組ませた。テーマは，What is your favorite sport？やWhat will you do during summer vacation？などである。時間を１分間設定し，時間内は即興で対話することができるように，既習表現の活用を意識させた。

エ　グループで発表原稿の練り直しをさせる。

出来上がった発表用の原稿をコメント記入用のワークシートに転記させ，班員全員にチェックをしてもらう（４人グループ）。難しい単語や習っていない表現をできるだけ，分かりやすい表現に置き換えるように，お互いがアドバイスをし合い，より良い発表原稿に仕上げる。

(5)　授業の実際（４／10時間）

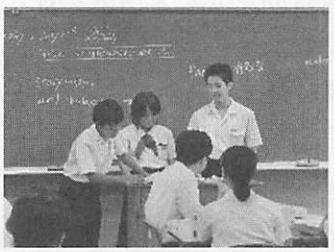
ア　主　題　イギリスについて相手に伝わるように発表しよう。

イ　ねらい

○既習事項を用い，相手に伝わるように発表することができる。

○発表の内容を聞いて理解することができる。

ウ　展　開

学習過程（形態）	時間（分）	○学習内容	○指導の工夫 ◇評価（評価方法）
1　あいさつ（一斉）	1	○英語であいさつをする。	
2　Warm-up（一斉）	1	○１分間チャットを行う。 	○１分間続くように，つなぎの言葉や質問などを使わせた。
イギリスについて相手に伝わるように発表することができる。			
3　原稿，資料の修正（グループ） **【協同】**	12	○個人で作成した原稿や資料をグループ内で検討する。 	**○正しい綴り，適切な英文かどうか，辞書を使って確認させたり，分からない表現を教え合わせたりした。【協同】**
4　リハーサル（グループ） **【協同】**	12	○完成した原稿や資料を使ってリハーサルを行い，より良い発表になるように改善する。	**○より良い発表になるように，表現方法などについて助言し合わせた。【協同】**
5　プレゼンテーション 質疑応答 感想・意見 （グループ） ↓ （一斉）	10	○イギリスについて紹介する。 ○発表を聞いて内容を理解する。 ○内容について質問する。 ○感想や意見を述べる。 	◇ 聞き手に伝わるように声の大きさ，発音等発表の仕方を工夫しているか。 （観察・原稿の確認） ◇発表の内容を理解しているか。 （観察・ワークシートの分析）

6　活動の振り返り（個人）	8	○活動を振り返って，振り返りシートに記入する。	○自己評価を含んだ振り返りシートを用意し，本時の振り返りをさせた。
7　あいさつ　(一斉)	1		

4　結果と課題及び考察

(1) 実践後自己評価より

本実践後，生徒に対してグループでのピア・エディティングやプレゼンテーション活動について振り返り（２年生78名）を行った。その結果と自由記述を以下に示す。

表１　授業後振り返りの結果　対象者：２年生２クラス（78名）（%）

Aよくできた　Bできた　Cあまりできなかった

番号	評価項目	評価（%）		
		A	B	C
1	イギリスについて情報を集める。	83	10	7
2	習った表現を使ってイギリスについて紹介文を書く。	72	22	6
3	班員と協力して資料をつくる。	86	12	2
4	班員の原稿についてアドバイスする。	52	38	10
5	班員と協力して発表の練習をする。	77	20	3
6	原稿を見ないで発表する。	46	45	9
7	聞いている人が分かりやすく発表する。	33	36	31
8	発表内容を理解する。	54	33	13
9	発表内容について質問する。	12	21	67
10	発表について意見・感想を述べる。	11	19	70

表２　授業後の生徒の感想

○　グループの人達と原稿を読み合うとき，分からないことや間違っていることを話し合った。アドバイスをもらうことで，どうしたらもっと分かりやすい英文になるのか考えることができた。
○　班員に自分の原稿を読んで修正してもらったので，内容の質を高めることができた。
○　自分で書いた原稿を班員に見てもらい，アドバイスをもらって，紹介文がさらに良くなった。
○　班の人がどのようなことを書いているのか，文の構成などを見たり，自分の原稿を見てもらったりした。自分は分かっていても，他の人にとっては難しい表現があったので，直したり，直してもらったりして，聞いて分かりやすい英文が完成したと思う。
○　分からないことや付け足したりしたらいいことを，一人では解決できなかった。班の人と知恵を出し合って，良い原稿にまとまった。
○　文法の使い方，単語の読み方など一人では分からなかったことも，皆に聞けば解決できたので，英文が良くなった。
○　難しい単語を習ったものに置き換えたり，英文をより分かりやすくしたりすることができた。今まで学習してきたことが，アドバイスに生かせたと思う。
○　辞書を使っても分かりにくい単語は，他の言い方に置き換えたりした。「staple food」は，主食という意味だが，分かりにくかったので，具体的に「potatoes」などの名詞に置き換えた方が分かりやすいとアドバイスをもらった。

(2) 考察

前述の指導の工夫に沿って考察を示す。

ア　話し手を励まし，聴こうとする態度を育成する。

アイコンタクトや相づちなどは，日頃から身に付いていないと，英語の対話の中で，自然にすることができない。後日，生徒の活動の様子を撮影した映像で確認すると，英語を話すこと，話している内容を聴くことが精一杯になり，ジェスチャーや相づちを伴わない対話活動になりがちであった。日々の英語の授業の活動の中で，根気強く行わせることによって，自然なジェスチャーや相づちが打てるよう習慣付けたい。

イ　様々な質問の仕方を定着させる。

教科書の内容を見ながらのリーディング活動においては，いくつかの質問を考えることができた。しかし，プレゼンの内容は自由度がかなり高く，教師の支援が加われば，内容自体が高度になる。そのため，他の人が発表しているのを聞き，内容を理解した上で質問を考えるのは難しかった。内容をメモしながら聴くなどの工夫を行ったが，リスニングが苦手な生徒にとっては，内容を理解した上での質問作成は困難なようだ。

ウ　既習表現を使った対話活動に取り組ませる。

テーマに沿ったチャットにおいては，１分間対話を続けるのは難しい。しかし，Let me see. などのつなぎ言葉を使いながら，対話を楽しむことのできるペアが増えた。タイムリーな話題や既習の表現を使えるようなテーマを設定し，今後も帯活動に取り組みたい。

エ　グループで発表原稿の練り直しをさせる。

英語の得意な生徒は，辞書を用いて難しい表現を使い，原稿を仕上げる傾向が強い。それに対して，英語の苦手な生徒は，原稿を修正することが難しかった。しかし，班で原稿の練り直しをさせることで，聞いている人に分かりやすく，より良い原稿に仕上がったという意見も多かった。

(3) 今後の研究の方向性

本研究において，コミュニケーションに必要な態度を定着させるための活動，内容を深く理解し，疑問に思うことを質問できるようにする活動，即興で英語を話すことができるようになるための活動，聞いている人によく伝わるような英文を書くための活動を行い，いくつかの成果が見られた。しかし，すべての生徒が主体的に取り組んでいたことにはつながらず，学び合いの活動になっていなかったペアがあったことが課題である。次年度の研究では，まとまった英文を書くとき，パラグラフライティングなどの枠組みを生徒に提示し，英語が苦手な生徒への細かな配慮や手立てを行いながら，すべての生徒が伸びていくよう取り組んでいきたい。また，今後さらに生徒が英語を使って生き生きと自己表現するような授業を目指していきたい。

参考文献

江利川春雄（2013）「協同学習を取り入れた英語授業のすすめ」大修館書店

研究（その2）

自律的学習者が育つ英語授業

― パフォーマンステストの実践より ―

（実践者）河野　圭美

1　研究テーマ設定の理由

持続可能な社会の形成のためには，さまざまな考えを持つ人々が良好な関係を築きながらコミュニケーションを図っていくことが必要となる。良好な関係の上に成り立っているコミュニケーションとは，相手の言いたいことを理解して適切に応じたり，自分の言いたいことを伝えたりすることである。その上で，グローバル化がますます進展することが予想される次代に生きる生徒には，異なる文化や歴史的背景をもつ人々と共存し，課題をより良く解決することができる資質や能力までもが求められている。そのために，英語を知識として蓄積するだけの学習者ではなく，学んだことを自ら積極的に使っていき，更にそれらを伸長させようとする自律した学習者を育成しなければならない。昨年度は，３年生を対象にした教科書本文の retelling活動を通して，すべての生徒が主体的に学ぼうとする英語授業を目指して研究を行った。英語が苦手な生徒にとって，教科書本文を理解することが精一杯であり，学んだことを活かして自己表現活動ができるレベルにまで達することができなかったことが課題である。そこで本年次は，中学校３年間の英語学習の到達目標を踏まえて，すべての生徒が主体的に学ぼうとするためには，１年生の段階からパフォーマンステストを取り入れて，生徒が自学自習できるような授業作りが必要であると考え，本研究テーマを設定した。

コミュニケーション能力を測るパフォーマンステストでは，学んだ知識を使いこなすことが求められる。暗記した知識を詰め込むだけではなく，授業において知識を活用して課題を解決していく過程において，生徒たちの思考力，判断力，表現力は育成されていくのではないかと考える。また，３年間の学習を通して，授業で学んだことが実際のコミュニケーションの場において活かされるようなパフォーマンス課題に取り組ませるため，生徒の学ぶ意欲が高まり，英語を運用しようとする力も伸長されると考える。

パフォーマンステストに向けた授業実践を効果的なものにするために，生徒のメタ認知を高め，協同の学びが実現されるような授業展開を通して本研究テーマに迫りたい。

2　研究の内容と方法

(1)　グループでの学び合い

ア　仲間を大切にする雰囲気作り

パフォーマンステストはクラス全体で行わせるため，生徒たちの心理的な負担や緊張感は大きい。そのため，日頃から誰とでも安心してコミュニケーションを図れるような温かい雰囲気作りを大切にしたい。そこで，相手の言いたいことを理解して適切に応じたり，自分の言いたいことを伝えたりすることができる技術を学ばせ，少しずつ自信をつけさせていくよう指導する。

イ　仲間からの支援が自分の学びとなる学習活動

パフォーマンステストに向けて，グループでスピーチの英文を添削し合わせたり，リハーサルを行わせたりする。友だちの英文を読んだり発表を見聞きしたりすることを通して，間違いに気付いたり良い表現に出会ったりすることは，自分自身の学びや表現力の向上にもつながる。またパフォーマンステスト本番に向けてその過程を仲間と共有しながら学習することで，自己を追求することができる。つまり，自分が目指す姿に向けて他者と対話しながら学習を進めていくこと

は，より良い自分へと変わっていこうと主体的に学んでいく力になる。これらの活動を通して，自分自身の成長や良さに気付いていくことは自尊感情が醸成される学びにつながる。

(2) 「CAN-DOリスト」に基づいた指導の充実

CAN-DOリストでは，英語を使ってどんなことができるのか具体的な行動が示されている。実際のコミュニケーションの場面で，どのようなことができるのか意識し，活用できる生徒を育成しなければならない。CAN-DOリストに基づいて，生徒にも身に付けたい力を明確に可視化することによって，学んだ知識を活用してより主体的に学ぼうとする意欲につなげることができる。

(3) フィードバックの充実

自分の行動や考えを客観的に見つめ振り返っていくことで，目標とする自分自身の姿へ成長していくことができる。そこで，毎回のパフォーマンステスト終了後，振り返り表を用いてフィードバックをさせる。教師からの評価やコメントもフィードバックとして与えていく。これらのことは，新たな目標に向けて学習意欲の喚起や自信につながる。また，１年間で４回実施するパフォーマンステストの振り返りを１枚のシートにまとめて書かせることで，自分自身の成長の過程や次への目標や計画を確認することができ，メタ認知能力を高めることができる。

３　研究の実際

(1) 単 元 名　Chapter 1　Project　自分のことを伝えよう

(2) 単元目標

観　点	目　　標
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	• 聞き手を意識しながら積極的に英語で自己紹介をしようとする。 • 友だちのスピーチに関心を持って聞こうとする。 • 自然な対話を続けることができる。
外国語表現の能力	• 内容がよく伝わるように英語で自己紹介ができる。 • 友だちの自己紹介を聞いて英語で質疑応答ができる。
外国語理解の能力	
言語や文化についての知識・理解	• 10 ～ 15文程度の簡単な自己紹介文を書くことができる。

(3) 指導計画（全５時間）

学習内容	◇評価規準（観点）	時間
自己紹介文を作ろう ○既習表現を用いて，自己紹介文を書く。 ○グループで，原稿をチェックし合い，より良い表現方法を知る。	◇be動詞と一般動詞を正しく用いたり，これまでに学習した表現が正確に使われていたり，十分に理解できる内容で書いている。（知識・理解）	2

自分の魅力が伝わるような自己紹介にしよう ○より良いスピーチするための留意事項について知る。 ○スピーチの練習を行う。 ○相手を意識して読む練習をする。 ○パフォーマンステストを行う。 ○振り返りを行う。	◇声量，姿勢，アイコンタクト，笑顔などに留意して，聞き手を意識して話そうとする。(関) ◇相づちを積極的に用いて聞き，会話を盛り上げようとする。(関) ◇適切な発音や，英語のリズム，抑揚などに気をつけながらスピーチすることができる。(表現) ◇スピーチを聞いて，その内容にふさわしい質問をすることができる。また，友だちからの質問を聞いて，適切に応じることができる。(表現)	3

(4) 指導の工夫

前述の２「研究の内容と方法」に即して指導の工夫について述べる。

ア グループでの学び合い

(ア) 仲間を大切にする雰囲気作り

全員が安心してコミュニケーションができる温かい雰囲気を作るために，まずは仲間を攻撃したり嫌な思いを与えたりせず，何度でもチャレンジできる生徒や，誰とでもコミュニケーションを図ることができる生徒を育てることが大切であると考えた。そのために，教師自身が生徒を受け入れ，どんな発言も大切にしようとする姿勢を示した。また，グループは男女各２名ずつの編成にし，男子の横は女子，女子の前は男子という座席で活動させた。

次に，相手に伝わるような話し方，そして相手のことを受け入れるような聞き方が大切であると考えた。そこで，生徒たちには「魅力あるspeaker」と「思いやりのあるlistener」を目指そうと伝え，そのための技術を教えた。まず「魅力あるspeaker」になるために必要な技術として，eye contact，smile，good posture, expression，nodを挙げた。また，次に「思いやりのあるlistener」になるために必要な技術として，eye contact，reaction, nodを挙げた。グループでそれらのことを意識して練習させ，相手ができてない点についてアドバイスし合わせた。

(イ) 仲間からの意見が自分の学びとなる学習活動

４人グループで英文を添削し合わせ，主に文法的な誤りを指摘させた。学習していない単語や表現を使っている場合は，別の表現に言い換えられないか考えさせたり，日本語を付け加えさせたりした。

活動の後半では，評価基準を明確にした評価表を用いて相互評価を行わせた。評価表は，「アイコンタクト・笑顔」「姿勢」「声の大きさ・表現力」の項目において評価基準を示した。図１は，eye contactとsmileを相互評価するための評価表の例である。４人グループで，一人の発表に対して，残りの３人は評価を行わせた。その際，一人が三つの項目すべてを評価するのではなく，一人の発表者につき３人の生徒がそれぞれ「アイコンタクト・笑顔」「姿勢」「声の大きさ・表現力」のうちの一つの評価項目を担当し，その項目のみ評価させた。そうすることで，評価者役の生徒たちは，責任を持って集中して発表を聞き評価に生かすことができると考えたからである。発表者と評価項目はローテーションしていく。評価表を相手に渡す際には，互いの個性を尊重し合う気持ちが生まれ，相手が自信を持ってテストに臨めるよう，肯定的な感想を言わせたり，テスト本番への意欲につながるアドバイスを話し合わせたりした。

☆☆☆あなたがチェックするのは Eye contact & Smile です。☆☆☆

自分の名前（　　）評価した人の名前（　　）

A～Cのいずれかに○をつけよう。

A（５点）	聞き手と目線を合わせながら笑顔で発表している。
B（３点）	笑顔でできているが，原稿をときどき見ながら発表している。 または，聞き手と目線を合わせているが，笑顔ではできていない。
C（１点）	聞き手と目線も合わせず，笑顔もできていない。

図１　相互評価で用いた評価表

イ 「CAN-DOリスト」に基づいた指導の充実

１年生の「話すこと」のCAN-DOリストは以下のように作成した。

学習到達目標	評価方法
自分のことや自分の好きな人について，適切な発音やリズム，抑揚に注意して，聞き手に伝わるように話すことができる。	スピーチ（9，11月）
写真を見せ，写っている状況について紹介し，相手からの質問に答えることができる。また，相手の写真についての紹介を受け，それに関して質問することができる。	スピーチ質疑応答（1月）
自分の大切な物について，コミュニケーションストラテジーを用いて，円滑に会話をつなげることができる。	対話（2月）

CAN-DOリストを基に，パフォーマンステストを通してどのような力を身に付けてほしいのか，以下のように生徒に示した。

☆できるようになろう☆
1．基本的な強勢やイントネーションに注意して，聞き手に伝わるように話すことができる。
2．友だちのスピーチを聞いて，感想を英語で伝えたり，その内容について質問したりすることができる。
3．友だちと簡単な対話をすることができる。
4．コミュニケーションストラテジー（相づち，つなぎ言葉，プラス１文など）を用いて，会話をつなげることができる。

図２　生徒に示したCAN-DOリスト

ウ フィードバックの充実

毎回のパフォーマンステスト後，振り返り表に「わかったこと，できたこと，がんばったこと」,「あまりできなかったこと，これからがんばりたいこと」,「思ったこと，感じたこと」を書かせた。教師からのコメントは，英語学習への自信につながるように良かった点を書いた。また，次のテストに向けて意欲が高まり更によい発表になるよう，どこを改善していけばよいのか課題も書いた。

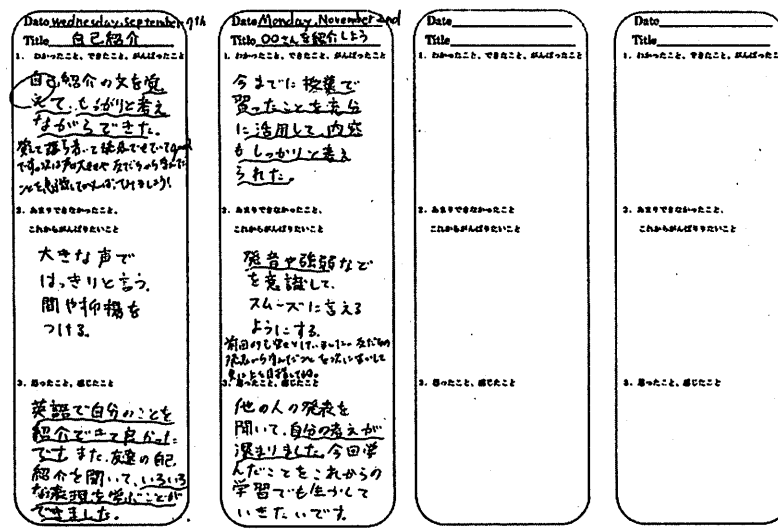


図３　パフォーマンステスト振り返り表

(5) 授業の実際（４／５時間）

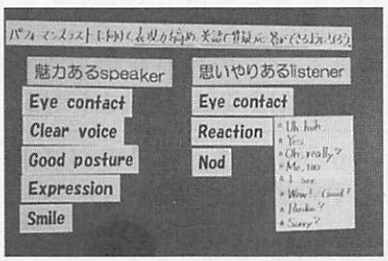
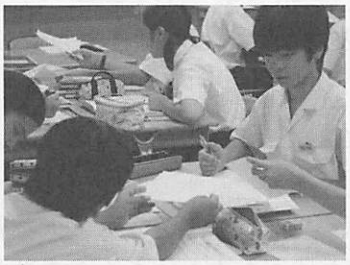
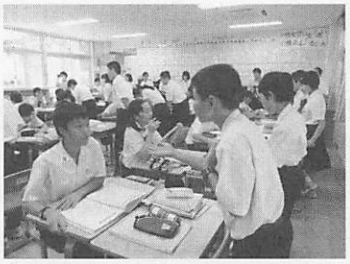
ア 主 題

○仲間とアドバイスをし合って，お互いの表現力を高めよう。
○英語で質疑応答ができるようになろう。

イ ねらい

○聞き手を意識したスピーチにしようとする。
○お互いのスピーチを通して，質疑応答ができる。

ウ　展　開

学習活動（形態）	時間	○学習内容	○指導の工夫　◇評価（方法）
1　Warm up (1)　歌を歌う （一斉）	5	○“Sing”を歌わせた。	
(2)　Q＆A（ペア）	3	○ペアですらすらQ＆Aができるように練習させた。	○ワークシートを活用した反復練習により，繰り返し練習させ，簡単な英語での会話が確実にできるようにした。
パフォーマンステストに向けて表現力を高め，質疑応答ができるようになろう。			
2　スピーチに大切な要素の確認 （一斉）	5	○スピーチをする際の大切な要素を確認した。 • アイコンタクトをとる。 • 十分な音量で読む。 • 正しい姿勢で読む。 • 自然な笑顔で行う。	 コミュニケーション技術
3　練習１ （グループ） 【協同】	15	○４人グループでリハーサルをさせ，アドバイスし合わせた。 • アイコンタクトがとれていたよ。 • もう少し大きな声で読むともっと伝わるよ。  グループでのリハーサル	○アドバイスを行う際の具体的な視点を提示することで，活動させやすくした。 ○評価表を用いることで，達成度合いを知り，更なる高みを目指したパフォーマンスに向けて修正・改善を行わせた。 **○友だちの表現の良かったところや改善点を伝え合わせることで，お互いの表現力を高めさせた。【協同】** ◇アイコンタクト，姿勢，声の大きさ，笑顔に留意してスピーチしている。　（観察・ワークシート）
4　練習２ （ペア）	15	○スピーチの後の質問と返事を考えた。 ○２，３回ペアを変えて，質疑応答の練習を行った。	◇お互いのスピーチに質疑応答をすることができる。　（観察）  ペアでの質疑応答の練習
5　まとめ（一斉）	2	○質疑応答の様子についてフィードバックし，どのような質問が良かったか数名の生徒に発表させた。	○良かった質問を全体でシェアすることで，自分たちで互いの良さや課題に気付き，次時のテストに向けて意欲を高めさせた。

5　成果と課題及び考察

(1)　グループでの学び合い

ア　生徒アンケートより　授業後アンケートの結果　対象者：１年生２クラス（80名）（%）

質　問　項　目	はい←			→いいえ
	4	3	2	1
①グループでのリハーサルに意欲的に取り組むことができたか	**80**	**19**	1	0
②グループでのリハーサルで，友だちからアドバイスをもらったことで，自信をつけることができたか	**64**	**33**	1	2
③グループでのリハーサルで，友だちからアドバイスをもらったことは，自分の表現力を高めることにつながったか	**77**	**20**	2	1
④グループでのリハーサルで，友だちに積極的にアドバイスや良かった点を伝えることができたか	**60**	**36**	3	1
⑤相互評価表は，自分のパフォーマンスを見直し，表現力を高めようとする意欲につながったか	**78**	**21**	1	0

〈生徒の感想より〉
○１回目でできなかったことが２回目でできるようになり，表現力を高めることができた。
○友だちに見てもらい，自分の課題に気付くことができた。
○いろいろな人とアドバイスし合ったので，自信がついた。
○「こういうところがいい！」と言われたときは，喜びであふれた。だからこそもっとうまくなろうと思うことができた。
○評価することで相手のスピーチを集中して聞くことができ，自分のスピーチに生かすことができた。
○友だちからの評価を実際に活用することができ，良い発表につなげることができた。
●友だちからのアドバイスで伝わったところもあったけど，分からなかったところもあった。
●友だちから教えてもらってばかりで，自分はアドバイスをすることができず，迷惑をかけてしまった。

イ　考察

仲間を大切にする雰囲気作りのために，パフォーマンステスト本番に向けての練習時に，毎回黒板にコミュニケーションのために必要な技術をまとめたものを貼り，生徒がいつも意識して取り組めるようにした。グループで練習する際も，黒板に貼られている技術ができているかについてチェックし指摘し合わせた。パフォーマンステストに向けての練習時以外でも，コミュニケーション活動の時に意識させ，毎回の授業で継続して指導を続けていくことで，生徒たちが少しずつ誰とでもコミュニケーションを図れるようになったり，技術が高まったりしていく様子を見取ることができた。

仲間からの支援が自分の学びとなる学習活動について，生徒のアンケート結果より，ほぼ全員の生徒がグループ学習に意欲的に取り組むことができた。生徒の感想にも，友だちからのアドバイスは自信になり，表現力を高めることにもつながったと書かれてあった。その例として次のような生徒がいた。英語が苦手で自信のない生徒が，１回目のパフォーマンステストでは一度も前を向いて発表することができなかった。しかし，ペアでのＱ＆Ａやインタビュー活動などでもコミュニケーション技術を意識して取り組んだり，グループ活動において仲間からのアドバイスを真剣に聞き，実行しようと努力していったりすることを通して，２回目のパフォーマンステストでは，eye contact を意識しながら大きな声で発表することができるようになった。その生徒の感想には，人前で英語を話すことができたことに驚きと嬉しさを感じたことが書かれていた。学級の中にも，助け合いながら学んでいこうとする雰囲気や，友だちの発表を温かい気持ちで聞く

雰囲気が作られていき，生徒が主体的に学んでいこうとすることにつながったのだと思う。以上のようなことから，「協同」学習は生徒たちの役に立っていることが分かった。しかし，１や２の評価をしている生徒のアンケートの自由記述欄は，「原稿を覚えていなかった」や「本番で緊張して原稿を忘れてしまう」という感想が書かれていた。原稿を覚えることは家庭での宿題としていた。グループ学習に至るまでに生徒個人がしなければならない課題に対してどうやる気を出させ，意欲的に取り組ませるかが課題である。また，グループでの学び合いにおいて，アンケートで「友だちからアドバイスをもらったことで，自信をつけることができたか」という項目と「友だちに積極的にアドバイスや良かった点を伝えることができたか」という項目について４の評価をした生徒は約６割であり，他の項目より評価が低かった。観察を通して，グループでの英文チェックは，英語力の点から考えると１年生にとっては難しかったのではないだろうかと思う。また今後，グループでの対話が，自尊感情が醸成され，表現力が高まっていくものになるよう，教師による支援はどうあるべきかについても研究していきたい。

(2) 「CAN-DOリスト」に基づいた指導の充実

生徒が成長を確認できたり，そのことがやる気につながったりしていくよう，パフォーマンステスト全体を通しての学習到達目標を生徒に示した。しかし，示すだけで終わってしまい，生徒たちがCAN-DOリストを上手に活用していく工夫をすることができなかった。本来ならCAN-DOリストを使って授業改善をしていかなければならなかったが，日頃の授業に積極的に取り入れていくことができなかった。今後，生徒がどんなことをできるようになりたいのかということも考えながら，生徒と教師双方からCAN-DOリストの見直し・作成を行い，授業改善につなげたい。例えば日々の授業でリストを活用できるように，ワークシートに到達目標の能力記述文を加えるなどの工夫に取り組みたい。

(3) フィードバックの充実

ア　生徒アンケートより　授業後アンケートの結果　対象者：１年生２クラス（80名）（%）

質　問　項　目	はい←			→いいえ
	4	3	2	1
①パフォーマンス振り返りシートでは，自分の成長を感じたり課題を見付けたりすることができましたか	**79**	**20**	1	0
②パフォーマンス振り返りシートで，自分の書いたことや先生からのコメントを読んで，次のテストに向けて意欲的に取り組もうとする気持ちになりましたか	**79**	**14**	7	0

〈生徒の感想より〉
○シートをもらって，自分の表現力を直すことができた。
○確実に自分が良くなっていると感じることができた。
○先生からの評価を次のパフォーマンスに向けて直そうとすることができた。
○振り返ることによって自分の課題をしっかりと見付け，意欲的に取り組むことができた。
○友だちや先生からここが良かったとほめてもらい，とても嬉しかった。

イ　考察

生徒のアンケート結果より，振り返りシートは，自分の成長を感じたり課題を見付けたりするのに役立ったようである。つまり，メタ認知を育成するのに役立ったと考えられる。

教師自身も，学習者の考えていることや感じたこと，何に課題をもっているのかなど一人一人の学習状況を把握することができた。また，コメントをフィードバックすることで，間接的では

あるが，教師と生徒とのコミュニケーションが可能になった。生徒一人一人を把握し，コミュニケーションを図ることは，授業の改善･成立に関わることであると思う。教師からの働きかけが，生徒へ内発的動機を与え，自律した学習者の育成につながると考える。

(4) 今後の研究の方向性

パフォーマンステストの実施を通して，自律的学習者が育つ英語授業を目指して研究を行ってきた。生徒の中に，良い発表になるように辞書を使って発音記号を調べたり，家庭でも表現力を高めるために，何度も音読練習を行ったりするなど自主的に学習を進めた生徒がいた。また，英語が苦手な生徒の中にも，自ら学んでいこうと前向きに頑張る姿勢が見られた。明確な目標を与え，仲間と共に学び合わせたり，自分自身の表現をフィードバックしたりしていくことは，生徒が主体的に学んでいこうとする姿勢につながったと思う。

本研究を終えて，コミュニケーション活動が，内容のみの伝達ではなく，「伝えたい」という気持ちが生まれ，自己肯定感が育ち，人と人との心がつながり合えるような活動となるために，生徒の仲間関係，生徒と教師の関係の中に信頼と温かい雰囲気があることが大切である。その土台があれば，生徒は安心して自分を発揮したり自ら学んでいったりすることができる。

今後，さらに生徒が身に付けた知識を活用して積極的にコミュニケーションを図っていこうとするような授業を目指していきたい。また，メタ認知を高めることで，自律的な学習者につながっていくよう，CAN-DOリストの見直しや，協同学習についての研究を深めていきたい。

参考文献

佐藤一嘉編著（2014）「ワーク＆評価表ですぐに使える！英語授業を変えるパフォーマンス・テスト中学１年」明治図書

今井典子・髙島英幸編著（2015）「小・中・高等学校における学習段階に応じた英語の課題解決型言語活動―自律する言語使用者の育成―」東京書籍

三浦孝・弘山貞夫・中嶋洋一編著（2002）「だから英語は教育なんだ―心を育てる英語授業のアプローチ―」研究社

第３章　おわりに

研究（その１）では，分かりやすく，表現力豊かなプレゼンを目指して，グループでの発表原稿推敲やリハーサルを行った。既習文法を用いた英文に直す，難しい単語はできるだけ簡単な単語に置き換えるなどグループで協力して発表原稿を練り合わせることによって，聞き手に伝わるプレゼンに仕上げるよう努力することができた。今後は，グループ内での話合いを英語で行う，質疑応答の回数を増やすなど，表現力を向上させる活動を継続したい。

研究（その２）では，クラス全員の前で自己紹介をするというパフォーマンステストを行う際に，グループやペアでの練習や評価し合う活動を取り入れた。学習仲間や教師からのアドバイスやフィードバックは，自分のパフォーマンスを振り返ることができるとともに，仲間と学び合わせることによって，主体的に学ぼうとする生徒を育てることができた。今後も，生徒が自律した学習者になれるよう，パフォーマンステストの充実に励みたい。